



Newsletter

Institute for Legal Studies

No.13

Kanagawa University

March, 2009

巻頭言

18歳は成人か

山田 徹

本年度の新入生向けFYSでは、大枠として一つのテーマを設けた方がよいと思い、「18歳は成人か」というテーマを掲げた。しかし結果はあまり芳しくなかったようである。もちろんセミナー運営の拙劣さということもあつただろうが、もう一つの大きな要因を挙げると、ほとんどが18~19歳である当事者の学生自身に、「成人」となることへのためらいがあったからだと思われる。酒やタバコの問題は別として、とりわけ政治の問題では彼ら自身が消極的で、投票権をもちたくないというのが明らかに多数派であった。「そのための知識や判断力に乏しい」、「投票への責任をもちたくない（もてない）」というのが、その主な理由である。

かつてドイツのハイデルベルク大学に滞在したときに、ハイデルベルク市の市議選が近いということで、市の現職議員や立候補予定者にインタビューを試みたことがある。当時の争点の一つに、同市の古城の地下にトンネルを掘って交通事情を緩和すべきか、という問題があった。立候補予定者の一人は学生で、彼は、トンネルを掘るとかえって自動車の交通量が増え、学生たちの自転車通学に支障をもたらす、という観点から、これを立候補の理由に挙げ、選挙キャンペーンを行なうと述べていた。理由はいささか三段論法的で、無論エコ問題も絡んでいるが、なるほど甚だ身近なシングル・イシューで身軽に立候補するものだと、感心して聞いたことを記憶している。

翻って日本の事情を考えると、最近はやや変わったかもしれないが、若い世代がこのように「気軽に」選挙に出る例は少ないだろう。ドイツの市議会は職業をもつ人や家庭の主婦で構成されていて、夜、会合を開くというような例が多く、そもそも政治参加への敷居が低い。そういうえば、マンハイム大学の研究室の助手も、近郊のフランケンタールという小都市で社会民主党の党支部の支部長を務めていたが、その後、ドイツ語でいう党的Ochsentour（厳しい出世道）を辿って、連邦議会の議員に登りつめた。日

本では若者の政治への関心の低さが指摘されて久しいが、大人の側で作る制度や慣習が彼らの関心を妨げている、という側面も無視はできないはずである。地方から出発してキャリアを積み重ねていくという道筋が、いわば制度化されていないので、二世議員やら官僚出身者やらが異常に多いという「日本の特有の道」が作られている。学生が自転車通学の問題で市議会に立候補する、というほどの道筋があつてもよいように思われる。あるいは、大学で政治家が講演を行なうことでも煙たがられる傾向があるが、ヨーロッパなどではこれはよく見かける風景である。いろいろな政治家が来れば、相互に中和されて大学も「中立的」になろうというものである。学生諸君の側もかつてのような「熱狂」は必要ないし、より穏健なゲーム感覚で政治に取り組めないだろうか。ディベート教育の必要性が叫ばれているが、政治はそのための格好の素材を提供するはずである。もっとも政治関係者にそのようなことを言っても、例えば大学で政党支部を作ること（これまたヨーロッパではしばしば見かける風景である）はなかなか実現しないようだし、われわれは、政治を日常的な感覚で語ることは苦手なのかもしれない。急進的なイデオロギーや、あるいは宗教意識をもちあわせないと、若い世代の政治への恒常的なアンガージュマンは難しい、とは時に指摘されるところであつて、これは難しい問題である。

と、ここまで書いてきたところで、さて次年度のFYSのテーマは一体何にしようか、という問題に思ひ立った。「18歳は未成年か」とでもしようか。これはこれでまた、解決が難しい頭の痛い問題ではある。

